3．中学３年

平和学習から日本と世界を考える

中　村　明　彦・原　　順　子
川　田　基　生・原　　英　俊

【抄録】　「国際理解と平和を探る」という学年テーマで１年間の取り組みを計画。修学旅行が柱となり事前学習から平和学習を取り入れ、グループ学習と個人研究でテーマへの追求を行なった。

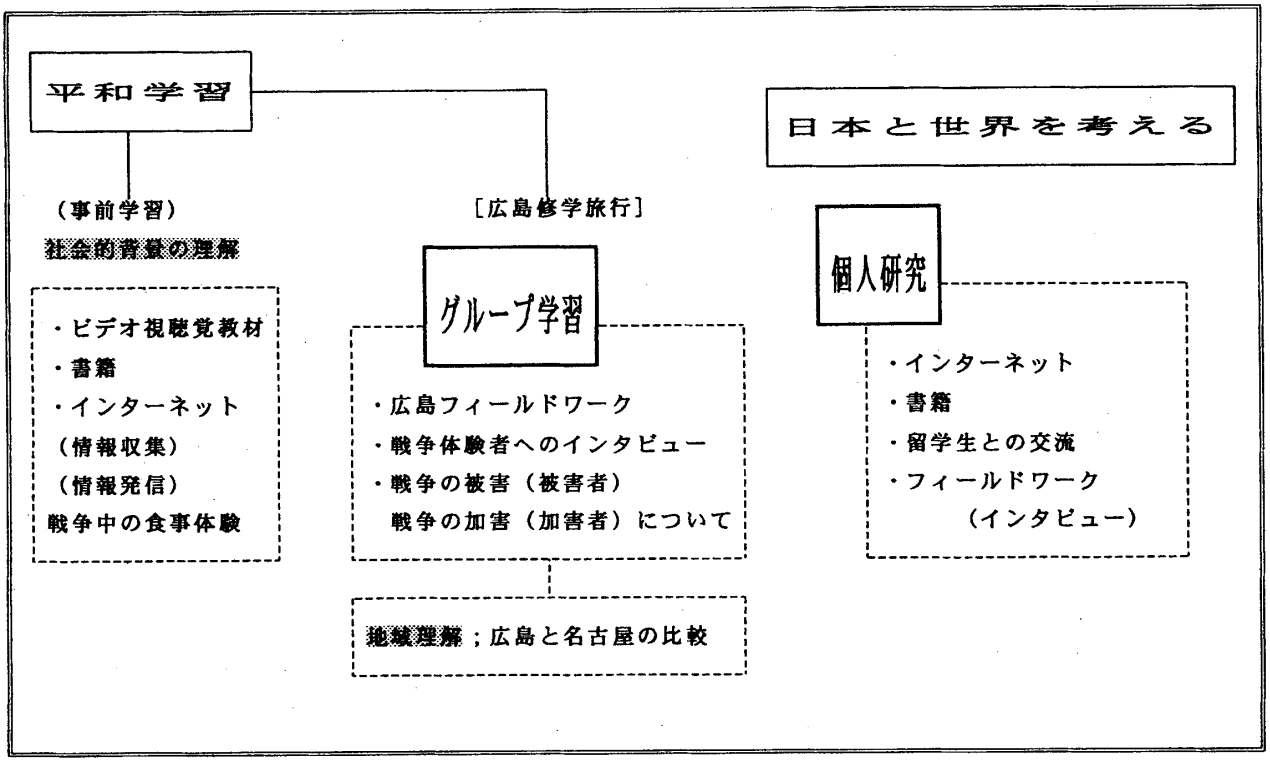
【キーワード】　国際理解　平和学習　グループ学習

１．はじめに

身近な相互理解、身近な国際理解を基盤として１年間で世界へ視野を広げ、自分なりの国際理解・平和の概念を築き上げることをねらいとして、サブテーマ「平和学習から日本と世界を考える」を設定した。　国際化が進む日本において、どのような変化が起こりつつあるのかを探りながら、かつて戦争という事態まで発展してしまった国どうしの争いがなぜ、どのように起こり、現在の日本にどのような形で影響していいる戦争の背景を探ることで自分たちの在り方を考えさせる。

２．学年の目標

各自が主体的に学習に取り組むことを目標とした総合人間科の３年目として、事前学習・フィールドワーク、事後のまとめ等でその成果があらわれるような取り組みをさせる。主体的に学習することが高校進学を目前にした中学３年生には大切なことと考えるからである。　修学旅行先（広島）でのフィールドワークは、グループ学習として実施し、最終的には学年テーマについてのまとめを個人研究として取り組ませる。そのためにも各自の研究課題を明確にさせる必要がある。　また、全員が日本語ワープロソフト「一太郎」もしくは「ワード」を使用できるようにして、修学旅行のしおりや研究集録の冊子の原稿をパソコンを使って実施させる。



3　学習方法と形態

平和学習の事前学習（社会的背景の理解）では、昭和初期の社会の様子に触れ、平和についてまたは、国際理解について関心を持たせるための導入的段階とする。学習方法としては、ビデオ；「二十四の瞳」「人間をかえせ」「毒ガスの島・大久野島」「“絆”高校生とヒロシマ」・書籍；「戦時中の生活」を利用した社会的背景の理解や、「すいとんづくり」「平和のリボンづくり」などの実習、体験を取り入れる。地域研究では、広島と名古屋をフィールドとして、名古屋における戦争被害と広島での戦争被害の違いや方言の違い、住まい、食物等比較検討する内容を設定させる。

国際理解に関しては、例年通り留学生との交流を数回実施する予定とした。

4．年間学習計画

1学期　社会的背景の理解を中心に、平和学習としての事前学習に重点をおく。
広島での研究テーマを決定し、フィールドワークの班を編成する。

2学期　夏休みを中心に地域研究のフィールドワークを実施。
広島研究旅行の事前学習と事後のまとめを中心にグループ学習を実施。

3学期　1・2学期の取り組みをもとに、個人研究のまとめを実施する。

	授業日	学習内容
1	4・18	1年間の取り組みについてのガイダンス
2	4・27	平和学習；ビデオ観賞「二十四の瞳」
3	5・02	憲法講演会
4	5・11	平和学習；書籍による事前学習
5	5・18	平和学習；書籍による事前学習
6	5・25	国際理解について（リトルワールド事前学習）
7	5・29	世界各地の地域研究（リトルワールド見学）
8	6・06	平和学習；ビデオ観賞「人間をかえせ・毒ガスの島」
9	6・15	パソコン学習
10	6・20	広島フィールドワークガイダンス
11	7・04	フィールドワークグループ活動
12	9・05	平和のリボン；図案づくり
13 14	9・07 9・14	フィールドワークグループ別プランづくり
15	9・19	平和のリボン；製作
16	9・21	フィールドワーク訪問地決定
17 18 19 20 21	10・03 ・05 ・12 ・19 ・26	フィールドワーク　事前準備
22	10・31	戦争中の暮らしの体験「すいとんづくり」
23 24	11・02 ・07	フィールドワークグループ別発表会 事前の取り組み計画発表
25	11・21	広島でのグループ学習のまとめ
26	12・05	広島フィールドワーク報告会
27	1・16	広島フィールドワーク報告会
28	1・30	個人研究への取り組み；テーマ設定
29 30	2・06 20	個人研究のまとめ
31	3・06	1年間の自己評価

5．授業記録

◎戦争と暮らし：総合人間科の中の「ものづくり」

今年度の中学３年の総合人間科では、学校選択の時間もあり、他学年よりゆとりをもってひとつの課題に取り組むことができた。たとえば、「ものづくり」である。広島の修学旅行に持っていこうと「平和のリボン」を作った。また、戦争中の暮らしを詳しく知ろうと「すいとん」を作って食べることを実施した。

（1）「平和のリボン」づくり

①目　的；被爆体験を話してくださる「平和のリボンの会」の皆さんの運動に参加させていただく。

②日　時；学園祭にも展示して運動を広めるため、二学期の初め頃。

③方　法；各班一つ。縫製を担当するものは、「研究集録係」その他のメンバーはメッセージの図案を考える。

④場　所；被服教室（縫製）と各教室（図案考案）

⑤作り方；＜図１＞参照（出来上がりは写真参照、リボンといっても１つ１つはメッセージを書いた垂れ幕でつなげてリボン状にする。）布、その他の付属品は教師が準備する。

＊参考資料；「ヒロシマ・平和のリボンあしたにむかって」（ヒロシマ・平和のリボンの会）

⑥指導を終えての感想

必要な材料を班ごとに準備するのがやや煩雑ではあるが、ミシンに不慣れな生徒も２時間で完成することができた。メッセージを考える時に、それまでの事前学習を生かすことができた。ものを作るということは考えをまとめたり、深めることに有効な手段だと確信した。「平和のリボンの会」の方々に喜ばれとことも追記しておくものである。

（2）「すいとん」づくり

①目　的；戦争中の暮らしについての理解を深める。

②日　時；修学旅行の準備をしている10月頃

③方　法；各班の「生活保健係」が班員の人数分（１人お碗１杯）を調理する。作り終えたところで他の生徒を調理室へ呼び、全員でいただく。教育学部の安彦教授を招待し講評をお願いする。

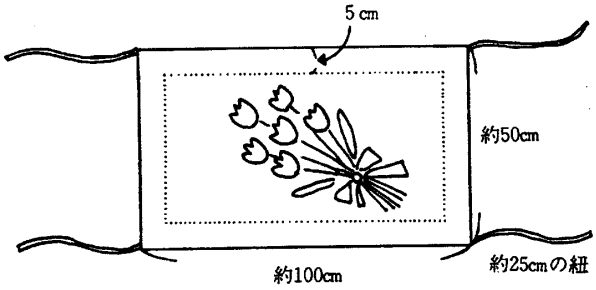
④場　所；調理教室

⑤作り方；生徒の祖父母、教師の母親など、当時の「すいとん」を食べていた世代の体

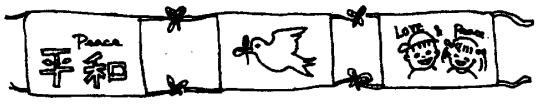
〈図１〉

反核、環境保護、人類の平等……力を力で制するのではなく、永遠の平和のメッセージを愛と思いやりをこめたリボンでつなぎたいと思います。
あなたご自身、作ってみてくださいませんか。

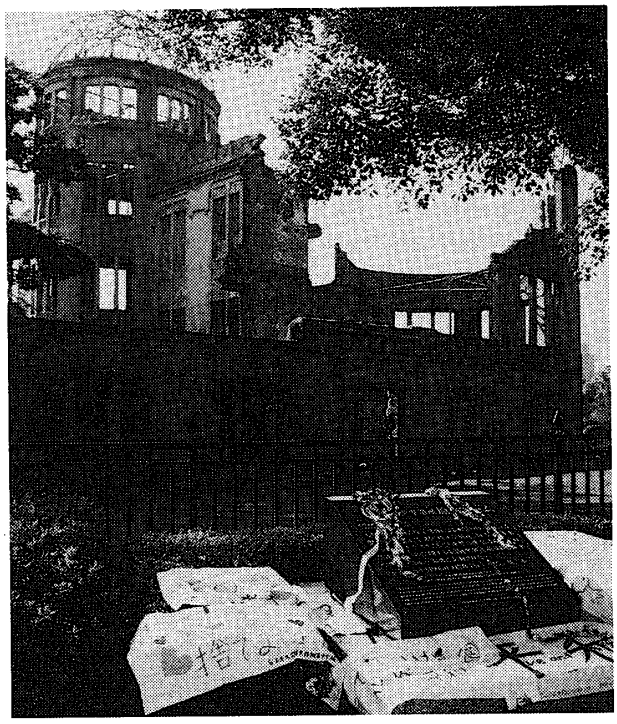
リボンの作り方



① 出来上がり寸法　　50cm × 100cm
② 布の色は何色でもよいが丈夫なものがよい。
　二重にして５cm入った周囲を四方にステッチし、四すみに、結ぶための紐を付ける。
③ 刺しゅう、アップリケ、蠟染め、キルティング、ニット、墨絵、詩、　俳句、油絵、など、どんな方法を用いてもよい。



〈写真１〉



験者に大まかな材料や作り方を聞いておく。調理の前日、実行委員の生活保健担当者がそれをもとに、小麦粉と水の割合に至まで試作を重ね、レシピを作る（<図２>参照)。

各班の係の生徒は、汁の身となる「さつまいもの芽」の皮むき、湯がいてあく抜きをするところまで、下ごしらえをしておく。当日はレシピをもとに調理する。みそ味か醤油味かは、係生徒の好みで決める。材料は教師が準備する。

＊参考資料；「戦争中の暮らしの記録」
（暮らしの手帳社）

⑥指導を終えての感想

調理にあたった生徒たちは、レシピ通りに一生懸命つくることができた。味も煮詰まった感はあったがまずくはなかった。(当時のものの忠実な再現ではなかったのだろう。) 全員の生徒に「すいとんづくり」を体験させたかったが、場所等の条件でこれが精一杯であった。食べた生徒の感想は、「たまになら（食べても）いいが、毎日続くのはいやだ。」というのが大半であった。

〈図２〉

戦時中の食事を体験（すいとん作り）

すいとん

材料（６～８人分）

下準備
・片手鍋に水を入れ沸騰したら芋のつると塩を少々入れて、アク抜きをしたらザルにあける

すいとん［小麦粉１１２．５g ／ 水１３５g］
水　［１２００cc　（６カップ）］
醤油　［６０cc　（大さじ４杯弱）］
味噌　［９０g　］
煮干し　［１２尾　］
芋のつる・さつまいも

《作り方》

① 人数分の水と煮干しを鍋に入れておく。（両手鍋）
② 小麦粉を水で溶きよく混ぜる。（塩を少々）
③ ①の鍋に水とさつまいも（入れたい人だけ）を入れる
④ 芋のつるを１口大に切って、水をしぼって鍋に入れる。沸騰している鍋に、スプーンで②を落とす。浮いてきたら次を入れる。
⑤ 醤油または味噌を入れて火を止める

(3)「ものづくり」に関しての感想

今回の「ものづくり」の特徴は、修学旅行の班活動の１つとして行なわれたことである。事前学習の中にこのような体験を伴う活動を取り入れることによって旅行の目的をより具体的に、明確に理解させることができたと思われる。また、係活動を活発にすることによって役割分担が徹底し、「ものづくり」では「その他の生徒」だった他の係の生徒も「自分も何かの形で参加したい。」という意識が高まり、バスレクや部屋割りといったところで積極的に係活動ができた。旅行中にもこの意識が生かされた。「ものづくり」は何より形にってあらわれるので、生徒の心に残りやすい。また、総合人間科のような「学び合い」の教科にはこれからも積極的に取り入れていきたい。

◎広島フィールドワーク各班のテーマとねらい
（広島グループ学習）

班	研究テーマ；研究のねらい
A1	名物－現代と古代－；名物の移り変りから広島の歴史を知る
A2	第２の被害地「呉」；原爆が人々に与えた影響
A3	広島の食文化；広島と名古屋の比較
A4	広島の水産業；水産業の発展とカキの養殖
A5	裸足のゲンin広島；裸足のゲンから戦争を考える
A6	自然に支えられる人々；広島の自然を探る
B1	平和学習；原爆の被害を見る聞く
B2	Touch in Hirosima；広島とふれあう
B3	我ら平和主義者
B4	放射線から受ける影響；被爆者の子孫が受ける影響を調査
B5	Now and then；戦争中の広島と栄えている広島
B6	へいわ；広島のことを知り、平和について学ぶ

Welcome to Motoo Kawata's Social Studies Room

Contents(click here)

NAGOYA UNIVERSITY HIGH SCHOOL JAPAN

Motoo Kawata

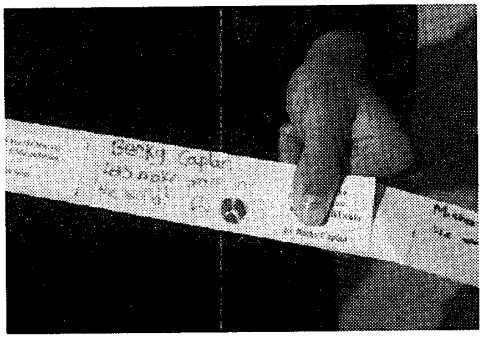
E-mail:kawata@highschle.educa.nagoya-u.ac.jp

表紙のページ⬆

（3）写真　㊤アメリカ合衆国デラウエア州の小学生
㊦広島・原爆ドーム前の
名古屋大学教育学部属中学３年生

プロジェクトの紹介のページ⬇

平和のリボン・広島プロジェクト 1998



Peace Ribbon Hiroshima Project

1998

Date:September15 to December15

Summary:I am a social studies teacher at a secondary school located in Nagoya, central Japan. I am looking forward toorganizing a Peace Ribbon Hiroshima Project with interested classes.We start off by visiting web sites to learn aboutthe importance of peace and exchangeopinions.My students will be visiting Hiroshima on November 11, 12, and13, 1998.Your students and our students can work together by e-mail . We will visit and interview from5survivors from A-bomb, Peace Ribbon group. Our students will show you the results at our web site,

heep://www.educa.nagoya-u.ac.jp/huzoku/AAA.html

Grade Levels:

9th grade. But all grades possible.

oups of Japanese 9th grade students, learning English as a foreigh la

Procedures:

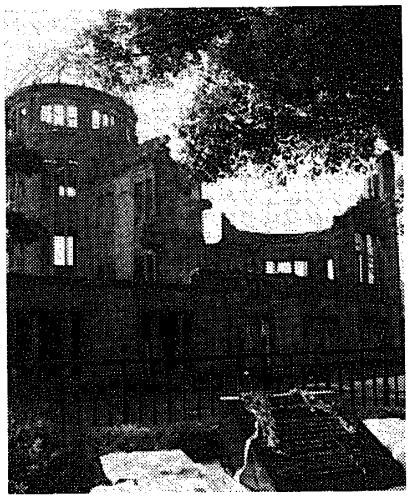
インターネットを使った海外の学校との共同学習

（1）使用メーリングリスト
グローバル・スクールネット

（2）協力校　アメリカ合衆国16校、カナダ１校、
オーストラリア１校、マリアナ諸島１校

Adams High School, Rota High School Pine Crest Prep School, Mary Ethel Costello School Raymonduill School Hopkinton High School, Winona Senior High School, Sonway Middle School The Mirman School, St.Michael School

A TABLE OF CONTENTS



A shot by professional photographer Mr.Toshiaki MAEDA

Projects

Our journey to Hiroshima

Witness to A-bomb

Letters to Hiroshima Project & informations

目次のページ⬆

（4）プロジェクトの内容
・被爆者の証言を読んでもらう。
・被爆者への質問を出してもらう。
・広島へ旅行して被爆者の方のお話をうかがう。
・質問への答を英訳して海外の生徒に送る。

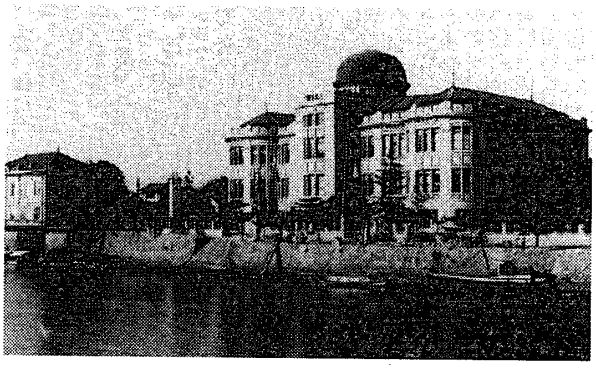
（5）目次の内容
・プロジェクトの紹介
・広島旅行
・被爆者の証言
・海外との文通記録

((2) の続き)Parkdale Secondary College, The Mirman School, Clonlara
Compu High Homeschooled (Michgan),Indepen dence High School,
Killeen High School, Warner School 等

広島旅行のページ➡

(6)旅行の記録
- 広島での班別フィールドワーク
- 被爆者からの聞きとり
- 大久野島での毒ガス工場についての学習

Witness of A-Bomb Survivors



Miyoko Watanabe
Setsuko Iwamoto
Reiko Kato
Shizuko Matsunaga
Takiko Sadanobu

No part of this witness may be reproduced or transmitted in any form or by any means without permission in writing from Miyako Watanabe

被爆証言のページ⬆

(7)広島の平和のリボンの会の方々の被爆証言
- この証言をした人に広島に行って
  お話をうかがった。

共同学習の記録のページ➡

(8)・プロジェクトへの意見
- 質疑応答
- 教員間意見交換
- 参考文献（サイトまたはホームページ）

このホームページの所在地
http://www.educa.nagoya-u.ac.jp/huzoku/AAA.html

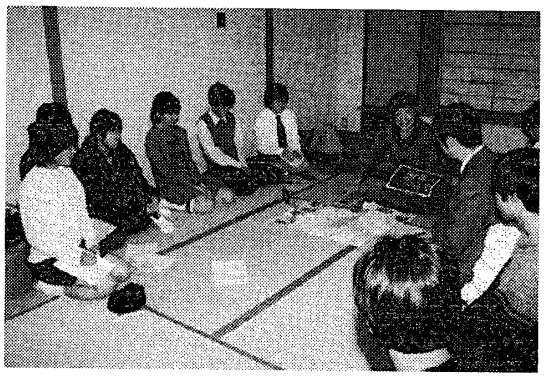
On November 11, 1998

At Hiroshima Station Square

After this meeting, our students scattered into 12groups. And they visited to ABCC(the research institute made by U.S.), museums, art gallery, the Hiroshima Castle, some places for questionnairing,an elementary school near the hypocenter of the blast on August 6, 1945, the naval academy (one of museum where are farewell poems composed on the eve of naval officer's death); a coffee shop where old victim of radiation sickness caused by an atomic bomb told precious story and students got coffees without charge, and old peoples home for victim of radiation sickness, etc.

previous home next

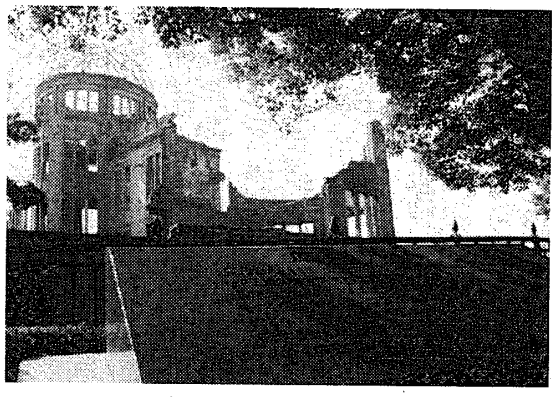
STUDY TIME



In the evening, at hotel, we had caught Mrs.Kato's word.Mrs.Kato had survived from A-bomb 1945.She illustrated the outline of being bombed,and how suddenly she had lost her family. She told us beautiful days before 1945 in the bloom of youth in Hiroshima. She did appeal the preciousness of peace.

previous home next

Letters to Hiroshima Project & informations



letters to Hiroshima Project
Q & A
Teachers' Room
The literature on this project

6．評価

中学３年の総合人間科の評価は
（１）タイムリーな助言
（２）時間差に注目した自己評価
の二つの形でおこなわれている。今年の報告では（１）のタイムリーな助言についてふれたい。どのような助言がおこなわれたのかを個人研究での学習過程に即して概観してみよう。

第１回　課題の設定

課題は自己設定を原則とし、筆者の担当した国際問題グループ20名の生徒は下記のテーマを自分で決定した。

生徒１　第２次世界大戦
生徒２　米軍基地
生徒３　外国人が日本でおこす犯罪の動機
生徒４　ユダヤ人差別
生徒５　日系アメリカ人について
生徒６　ＰＫＯ・世界の国の治安維持
生徒７　北朝鮮と平和
生徒８　人種差別について
生徒９　日本の日常と世界的視点から
生徒10　第２次世界大戦におけるドイツとイタリア
生徒11　アイルランド近代史
生徒12　第２次世界大戦後の日本と世界
生徒13　日本が世界に与える影響
生徒14　アメリカとキューバの野球
生徒15　ＷＡＲ
生徒16　黒人人種差別について
生徒17　日本と世界の関係
生徒18　言葉
生徒19　ＮＥＴＷＯＲＫ
生徒20　外国人と犯罪の関係

国際問題グループの第１回の授業での筆者の助言は「他の人に自分の課題を説明してみましょう」であった。ほぼ全員が説明できなかった。発表者は小声であり断片的、他の生徒はおしゃべりをしていたりの状況となった。そこで黒板に各々自分の課題を記入するよう求めた。そして筆者が数人に質問する形をとった。他の生徒にわかるように発言できる生徒と黒板に書かれた課題の意味が取りにくい生徒を指名した。

「もう少し詳しく説明して下さい。」
生徒９　日本の日常と世界的視点から
「一応そう書きましたが、まだ決まっていません。」
「なぜアイルランド近代史を選びましたか」
生徒11　アイルランド近代史
「興味深いビデオがあるからです。」
生徒13　日本が世界に与える影響
「どんな影響を調べますか」
「だから・・・」（聞き取れない、ひとりごとのような意味のとりにくい未熟に抽象的な説明がされた）
生徒18　言葉
「外国の言葉と日本の言葉を比較して異文化を理解したいのです。」

第２回　副題

第１回で、多くの生徒がまだ漠然とした問題意識の水準にあることが明らかになったため、第２回の授業では課題の焦点化を促すことにした。

「副題を考えましょう。広く浅くでは論文は書けません。もう少し焦点を絞りましょう。副題を黒板に記入し口頭で報告。」

生徒からの質問で多かったのは、「前回設定した主題を変えていいですか」であった。筆者は躊躇することなく「どんどん変えなさい。」と答えていた。「主題を変えていいですか」への対応はやがてティームティーチングの同僚の間で話題となった。最初の主題と論文完成時の主題を比較し、同一の主題であった生徒の比率は

筆者のグループ	５％
中村教諭のグループ	20％
原順子教諭のグループ	40％
原英俊教諭のグループ	47％

95％の生徒の題目の変更を点検してみよう。

生徒１　~~第２次世界大戦~~　沖縄戦
　　課題の焦点化と言える変化
生徒２　米軍基地（追加）沖縄の悲劇
　　課題の焦点化と言える変化
生徒３　~~外国人が日本でおこす犯罪の動機~~
　　中高生の犯罪
生徒４　~~ユダヤ人差別~~
　　被爆二世　母の不安
生徒５　~~日系アメリカ人について~~
　　戦争と日系アメリカ人
　　課題の焦点化と言える変化
生徒６　ＰＫＯ~~・世界の国の治安維持~~
　　課題の焦点化と言える変化

生徒7　北朝鮮と平和
生徒8　人種差別~~について~~
（追加）世界の大きな課題
生徒9　~~日本の日常と世界的視点から~~
心に住む時間　時は夜空に消えてゆく
生徒10　~~第2次世界大戦におけるドイツとイタリア~~
ムッソリーニ
課題の焦点化と言える変化
生徒11　~~アイルランド近代史~~
北アイルランド近代史
課題の焦点化と言える変化
生徒12　~~第2次世界大戦後の日本と世界~~
世界の事実　人口問題
生徒13　~~日本が世界に与える影響~~
日本は何をして何をされたか
生徒14　~~アメリカとキューバの野球~~
世界の軍備について
生徒15　WAR（追加）湾岸戦争
課題の焦点化と言える変化
生徒16　黒人人種差別について
生徒17　~~日本と世界の関係~~
外国人から見た日本人
課題の焦点化と言える変化
生徒18　言葉（追加）イタリア語と日本語を比較し
国民性の違いを研究する
課題の焦点化と言える変化
生徒19　~~NETWORK~~
インターネットの影
穴だらけのネットワーク
課題の焦点化と言える変化
生徒20　~~外国人と犯罪の関係~~
親子関係　家庭環境

生徒3と生徒20は友人で最初は外国人の犯罪をテーマとしていた。筆者から「六法全書」を借り刑法、軽犯罪法を調べる。外国人の犯罪に関する資料は得難い。

生徒3は犯罪についての最近のニュースは同年代の子供の犯罪が多いことに注目し、「私は、未成年の犯罪のすべてを調べるのにはとても多くの時間がかかると思ったので、未成年が多く犯す犯罪の多いものから5つを予想してみました。」として仮設による課題の焦点化をしている。

生徒20は友人100人アンケートを実施した。

学校内で生徒がなぐりたくなる相手
・いない　10人
・教　師　20人
・友人　クラスメート　60人
・先輩　後輩　10人

（「中学3年　総合人間科　1998年　個人研究論文集」80ページ）

最近の犯罪と外国人というテーマから、犯罪、そして身近な罪を犯しそうな気持ちへと課題の焦点化をしている。

第3・4回　構成を考えさせる個別指導

資料、材料をあつめ、参考文献をあさる。この段階での助言は「構成を考えよう」とした。ティームティーチングの他の指導者は「仮説をたてよう」であった。

この時間帯の生徒たちは、図書室での参考文献探し、コンピュータ室でのインターネット利用の情報検索、参考文献の決まっている生徒はこのグループに割り当てられたTM教室で自習と分散する。

時間を決めて一人10分の個別指導をした。個別指導の内容は指導と言うより論文の構成の報告、一番良いところを説明を求めた。毎回提出される報告書を事前に読み質問をした。論文の章だて、議論の絞り込みを意識させる。構成のメモが出来てゆく。3人の生徒（2,12,15）はまだ主題も決まらず、報告書も白紙で提出していた。

生徒2は「米軍基地」というテーマでコンピュータ室でのインターネット利用の情報検索をしようとしたが、待ち行列で1時間空費。やっと順番が来ても有効な情報は得られず。締め切り間近となり高校政治経済の資料集を渡す。提出された論文は要領良くまとまっていた。

生徒12は「第2次世界大戦後の日本と世界」の題だったが具体化せず。締め切り間近となり人口問題に取り組む。他のグループの友人と図書室で相談して決めたようである。

第5・6回　論文作成　読み直し

生徒は作文、個別指導の続行。

論文の提出

全員に必ず提出させるべきか、ティームティーチングの同僚の間で見解が分かれた。議論としては、「締め切り後は受け付けない」で決着したかに見えたが、学級担任は黙々として集め続けた。最後まで提出できず苦心したふたりの生徒のテーマは
「何をしたら原爆は消えるのか」
「武器を捨てれば平和になるか」であった。